

私は実戦的生命科学英語コミュニケーションプログラムのご支援のもと、Cell 誌が主催する国際学会“Cell Symposia CRISPR: From Biology to Technology”にポスター発表者として参加させて頂きました。学会は2017年10月22日から24日までの3日間、スペインにある美しい海辺の街シッチェスで開催されました。今回の渡航で得られた経験を二つ報告させて頂きたいと思います。

一つ目は、ポスターセッションでの経験です。国内学会では発表者が自身の研究を説明し、最後に質問を受けるというパターンが多いように思います。Cell Symposiaのポスターセッションでは一方的に話している時間は殆どなく、ほぼ質疑応答の時間でした。「発表をしている」というより「話し合っている、議論している」という印象を強く受け、濃密な時間を過ごす事ができました。英語に関して言うと、思い切って話してみれば案外伝わります。また、英語が下手だからといって去っていったりする人はいませんでした。実験不足で答えられない質問もあり悔しい思いもりましたが、総じて非常に有意義な時間だったと感じています。

二つ目は、海外の競合相手の大学院生と知り合いになれたという経験です。彼は学会二日目の口頭発表で自身の研究発表を行っていました。その日は話す機会が無かったのですが、学会三日目の私のポスター発表を見に来て下さり、そこでお互いの研究結果の議論から世間話まで、色々な話をする事ができました。海外の知り合いが殆どいない私にとって、稀少な経験でした。今度会う時には互いに新しい研究結果を持って、議論ができれば素晴らしいなと思います。

以上のように、私は海外学会に参加する事で海外の方々との出会い、刺激を受け、研究のモチベーションを高める事ができました。海外学会は単なる研究発表の場ではなく、「もっと自身の研究を深めたい!」という気持ちにさせる絶好の機会でもあると思います。たとえ海外渡航が未経験だったとしても、臆せずに渡航すれば良いと思います。

最後になりましたが、学会参加の機会を下さった指導教員の垣塚彰先生、ポスター作成及び発表練習に尽力して下さった情報学研究科の前川真吾先生、生命科学研究科のJames Hejna先生に深くお礼申し上げます。生命科学研究科に関わる皆様のお陰で素晴らしい経験をする事ができました。本当にありがとうございました。



学会会場近くの風景